

## 第56歩

### 扇の的・第二弾

本市のシンボルである屋島は、平家物語で描かれる源平合戦の名場面、那須与一（なすのよいち）が活躍する「扇の的」の舞台です。その「扇の的」の故事を題材に、新作オペラが作られて、サンポートホール高松大ホールで上演されたのが、那須与一が扇の的を射てから830年ほど経った2014年でした。サンポートホール高松開館10周年事業として企画制作され、好評を博したこの「オペラ「扇の的」～ここからはじまる～」は、作曲、台本、出演者、演奏、広報などほとんどの分野で香川にゆかりのあるメンバーが参画、いわばオール香川で制作されたものです。そして、関係者のご尽力により、海外（ブルガリア）公演も行われました。

それから10年を経て、今度は、サンポートホール高松の開館20周年記念事業として、またしてもオール香川で、続編を制作する運びとなり、「扇の的」～青葉の笛編～一ノ谷の合戦、屋島へ」が誕生、去る10月26日に世界初演が催されました。今回の舞台は、1185年2月の屋島の戦いの一年前、1184年2月の神戸、一ノ谷の合戦です。源義経（みなもとのよしつね）の鶴越（ひよどりこえ）の逆落（さかお）として有名なこの合戦を題材として、そこで戦死した笛の名手、平敦盛（たいらのあつもり）とその妻、葵（あおい）の夫婦愛を描いた作品となっています。ちなみにこの物語のキー・アイテムである平敦盛が妻、葵に届けてくれと敵将、熊谷直実（くまがいなおさね）に託する青葉の笛は、空海が唐から持ち帰ったものだということです。ここにもこの物語の讃岐との結びつきがあります。青葉の笛を手にした葵は、夫、敦盛の戦死を悟り、この笛とお腹の中のわが子のために、ただ、生きるために生きようと決意し、船で屋島に向かうところでエンディングを迎えます。

新作オペラ「扇の的・第二弾」の完成により、古くから関西汽船やジャンボフェリーの航路で直接結びついていて、人や物の行き来も盛んな本市と神戸市との交流がさらに深まることを期待したいと思います。そして、海外も含め、多くのステージで再演の機会が得られることを願っています。

